

欧州視察報告＜7＞

視 察 項 目	少子化対策（次世代育成の支援） 次世代を担う子どもたちへの教育環境整備
視 察 日 時	2009年2月5日（木） 午前9時30分～12時00分
視 察 先 名	ラーエルベルグ幼稚園
説 明 者	カーリニ・ハイトアホート園長
担 当	吉沢章子

【ラーエルベルグ幼稚園の概要】

学齢前の幼児教育にあたる公立幼稚園で、ウィーン幼児友愛連盟が経営に当たる幼児センター。託児施設部と幼稚園部を兼ね備える。系列幼稚園は現在ウィーン市内に142施設・500グループ存在する。同幼稚園は年齢毎に5グループの構成・現在109人の園児が在籍し、敷地規模はウィーン市内最大。



園舎に向かう視察団

【園内の視察】

曇天のウィーン市内を郊外に向かってバスで走る。小高い丘の坂を上ると、木立に囲まれたラーエルベルグ幼稚園が見えてくる。自然に恵まれた広い敷地、門にはカラフルな「KINDERFREUNDE」の文字。一見して、育児環境の良さが想像されるしつらいである。視察団一行が敷地に入ると、カーリニ・ハイトアホート園長が笑顔で迎えてくれた。

「今週はエネルギー休暇のため、園児が少ないのです。」という彼女の説明に、地球の気候変動に対するEUの先進的な取り組みを実感した。

視察は、随時質疑しながら年齢毎のグループに分けられた部屋を回り、園庭を見学、最後に着席しての質疑応答というスタイルで行った。

◇ 年齢1～3歳児のグループ（定員15名で1グループのみ）

※ 保育士2名、お手伝い1名の3名体制

乳幼児のため、靴を脱いで視察。

子ども達は兄弟などがいるため自由に部屋を行き来する。内装は木材を多用し、温かみを感じさせる。

写真は、我々視察団のために、子ども達がお遊戯を披露してくれているところです。



視察団にたわむれる兄弟

- ◇ 年齢3～6歳児のグループ（定員25名で3グループ）
- ※ 保育士2名、お手伝い1名の3名体制

お昼寝は別室なので靴は脱がずに入室。

室内をキッチン・リビングなどのシチュエーション毎にしつらえてある。



保育士と勉強中

- ◇ 年齢6～10歳児のグループ（学童保育）
- ※ 保育士2名、宿題お手伝いスタッフ若干名
- ※ 利用時間2時～4時



エネルギー休暇とインフルエンザでお休みが多いため、園児は他の部屋と一緒に保育中。

【質疑応答】

Q1 : 連盟設立の経緯は？

A1 : 1920年代、共働きの家庭を助けるため、主に労働者階級のために互助会として発足。

Q2 : 教育方針は？

A2 : 幼稚園は、家庭にはなりえない。子どもの育ちを助けるあくまで補助である。しかし、昨今は、幼稚園に子育てを丸投げしているように感じる。

Q3 : 開園時間と延長保育は？

A3 : 6時30分～17時 延長なし。(系列幼稚園では企業内等で対応している) 夏休みは稼動している。

Q4 : オーストリアの就労形態と男性の子育て参加は？

A4 : オーストリア人は、ほぼ共働き。勤務時間は、朝7時～午後4時頃までというケースも多い。育児休暇は男性の場合100%は取れていない。父・母分担して取得している。

Q5 : 行政からの補助は？

A5 : ウィーン(ウィーンは州であり、市である。)から、幼稚園グループ毎に支給されている。金額は僅か。子ども毎には補助金はない。収入の少ない保護者の助成金は市が支出している。

Q6 : 所得水準と幼稚園の月謝は？

A6 : 平均月収2000ユーロ・月謝295ユーロ。月謝は特別高くない。

Q7 : 入園申し込み状況は？

A7 : 非常に人気があるため、申し込み多数。現在2013年（4年後）まで予約でいっぱい。申し込み順に入所。

Q8 : 未払いに対する督促は？

A8 : 督促は再三行う。その後、退園処分になっている。深刻さは各園によって違う。

Q9 : 食事の提供は？

A9 : 園は作らない。ケータリングで対応。弁当持参の子も多い。

Q10 : 誘拐などに対する安全対策は？

A10 : 子ども一人でここに来ることは禁止。しかし、誘拐などはないに等しい。営利誘拐は皆無である。

Q11 : 障害児の受入れは？

A11 : 法律により、この幼稚園では扱ってはいけない。公立の幼稚園で統合教育がなされている。

Q12 : 保育士の確保策は？

A12 : どこの園でも問題。休暇の関係からか、都会ではなく故郷で就労したい人も多い。現在検討中の課題である。



施設見学後、園長に質問する視察団

【統括】

先進国の共通の課題である少子化対策は、各国それぞれの事情を映している。オーストリアでは20年程前から、東ヨーロッパ等からの移民による出生率が高まり、国全体としては少子化とは言い難いが、「このままではオーストリア人は死に絶える」と言われるほど、移民ではないオーストリア人の少子化は深刻であるとのこと。

園長先生は、この幼稚園はほとんどオーストリア人であるが、前任園は98%が外国人だったと述べられた。国策として移民政策をとっていないとのことなので、自然増ということかもしれない。しかしながら、本来の意味での少子化は改善されていないのも実情である。ウィーンの幼稚園施策は、市民の生活スタイルに整合しており、充実していると感じた。ニーズと施策が整合していることが、市民の満足と安心につながると実感した。

本市行政および我が国の政策を振り返ると、少子化対策は、あまりにも中途半端である。市民のニーズに対するメニューが用意されていない。保育園・幼稚園ともに、明快なビジョンの基に目標と施策と予算配分が示されるべきである。そのためには、現場をもっと知り、ニーズの本音を充足し、さらに喚起する先手の施策が必要である。今の施策の在り方は、後手であり付け焼刃であると言わざるを得ない。今回の視察を通じて、しっかりとした裏づけから構築された施策の普遍性を痛感した。

ラーエルベルグ幼稚園は敷地が広大なため、1年に1度、幼稚園グループ全体のパーティーが開催されるそうである。築40年の園舎も丁寧に使われている。伝統を大切にするお国柄と、子どもたちの育ちを見守る人間としての共通のDNAを実感し、笑顔で見送ってくれる園長先生に感謝しつつ、視察地を後にした。



広大な園庭



園長先生（前列中央）、保育士と視察団